

シリーズ戦争 子どもたちが綴った戦争体験(全5巻)

第3巻 学校は戦場だ! —ほしがりません勝つまでは—

もくじ

この本を読んでいただくみなさんへ 3

1 ままれ大空 僕等のおうで —紀元は2600年— 4

私たちの決意 私たちのちかい/私たちの標語

●コラム 学問の世界にも統制

紀元2600年 「紀元二千六百年」

●コラム 紀元節と紀元2600年

2 学校は戦場だ —決戦下の国民学校と子どもたち— 10

教室が変わっていく 明るい教室/時局所感

学校が身心を鍛える道場に 身心鍛錬運動

瀬田国民学校 (学級日誌)

●ことば解説 御真影・奉安殿/コラム 学校での授業が停止に

満州での日本人としての教育 私の日常生活(蒙古語からの訳)

3 進軍だ! 僕等は日本の少国民 30

軍国少年少女として 行軍/胸を張って/暁天動員大会/少年団訓練/(校長の手記)

4 ほしがりません勝つまでは —銃後の家庭や地域の生活— 38

食物は一汁一菜とし、お弁当は日の丸弁当 興亜奉公日/節約

すべてを戦争に 軍用兎/真綿/真綿とじ/勤労奉仕

●ことば解説 ほしがりません勝つまでは

飢えた子どもたち ひもじさにひとのべんとうをぬすんでたべた子ども

●ことば解説 配給制度

家庭も小さな鉱山だ 金を政府に売りましょう/銅貨、白銅貨の回収

貯金が弾丸の資金に 貯金

おわりに 教師の良心 58

僕らの力/ミノルちゃんのおとうさん

表紙 絵 「瀬田国民学校絵日記 昭和十九年 五年智組」 12月18日。何度も空襲警報がなった。(大津市歴史博物館所蔵)

写真 国民学校で、米英を倒す訓練が行われた。(林忠彦氏撮影 『写真集子どもたちの昭和史』)

裏表 左の絵 「瀬田国民学校絵日記 昭和十九年 五年智組」 4月5日、入学式。(大津市歴史博物館所蔵)

右の絵 「瀬田国民学校絵日記 昭和十九年 五年智組」 11月2日、稲刈り。(大津市歴史博物館所蔵)

この本を読んでいただくみなさんへ

戦争は銃弾の飛び交う戦場だけで戦われるわけではありません。国内の生産工場や農漁業などの生産現場をはじめ、地域や家族の日々の生活の場面で、そして学校でも戦争は戦われたのです。この「銃後の戦争」で、子どもたちは、傍観者ではなく、重要な働き手でもありました。子どもたちも戦争に参加していたのです。

日中戦争の開始からアジア・太平洋戦争に突入していくなか、子どもたちの生活の場であった学校は大きく変化していきました。「学校は戦場だ」というスローガンがかかげられました。学校の生活が軍事化していくことを子どもたちはどう受けとめていったのでしょうか。貴重な体験が書き留められています。

みなさんの近くにも、戦争のときに学校で学んでいたおじいちゃんやおばあちゃんがいるかもしれません。みなさんのお父さんやお母さんも祖父母から話を聞いているかもしれません。戦争中の学校体験の話をぜひ拾い集めてみましょう。

戦争は、地域や家族の生活も大きく変えていきました。国民は、戦争の勝利のため「ほしがりません勝つまでは」と全力で協力していきました。生活物資は乏しく、食べるものにも困ってしまいました。その時期に、子どもたちは何を考え、どう行動していたのでしょうか。この巻には、その時代の子どもたちの生活を語っている作品がたくさん収められています。

それらを読みながら、子どもたちにとって戦争とは何であったのかを考えてみてください。



女子は弓道やなぎなたをした「体錬」の授業。身体をきたえる体操と武道の授業だった。(影山光洋氏撮影 『写真集子どもたちの昭和史』)



9月18日、高等科の人が学徒動員で松下金ぞくへ。(「瀨田国民学校絵日記 昭和十九年 五年智組」大津市歴史博物館所蔵)

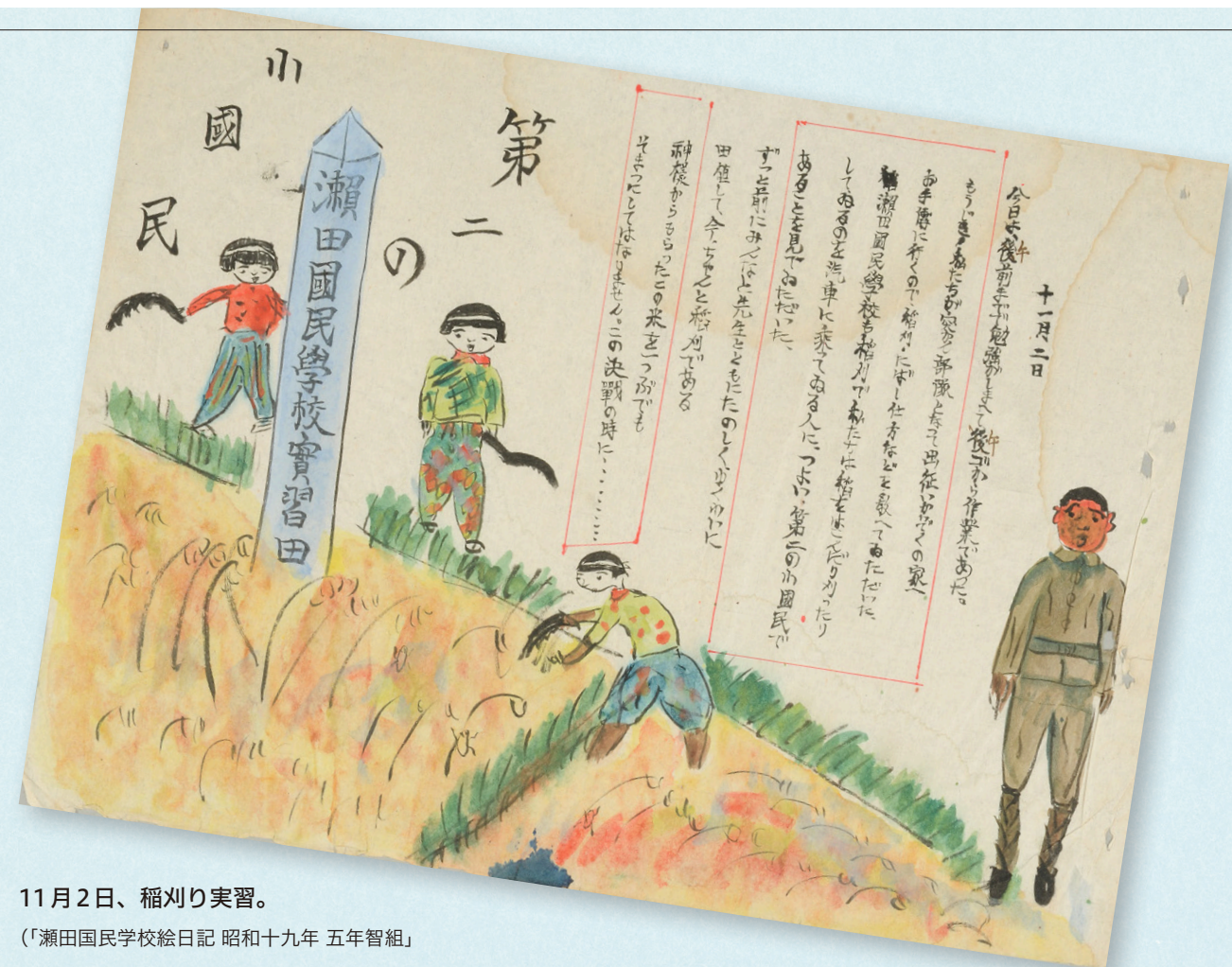
44年9月18日

(略) 今日(きょう)は高等科(こうとうか)の人が戦争(せんそう)にかつ(か)つたために学徒動員(がくせいどうぎん)として瀨田橋本(せただはしも)にある松下金ぞく株式会社(かぶしきがいしゃ)へ行(い)かれることになっ(な)ったので今日(きょう)行(い)かれることになっ(な)りました。みんなはうれしそ(う)うな顔(かほ)をして朝礼(あさらい)に集(あ)って来(き)られた。式(しき)をあげて高等科(こうとうか)の人の代表(だいひょう)と六年生(ろくねんせい)の人のあいさつ(あいさつ)があっ(あ)った。大へんじょうず(おほへんじょうず)によま(よ)まれた。式(しき)が終(お)わって私(わたし)たちは見送(みおく)りに行(い)った。みんな元氣(げんき)よく足並(あしなみ)そろえて男(おとこ)は「まきぎやはん」(*)女(め)は「はちまき」をしめ(し)めて一ばん始(はじ)めに瀨田国民学校(せだのこくみんがっこう)の旗(はた)をたてて敬礼(けいらい)をしておられ(ら)れた。

*学徒動員：日中戦争(にっちゅうせんそう)以後(いご)、国内(こく内)の労働力(らうどうりき)不足(ふそく)を補(おぎな)うために学生(がくせい)・生徒(せいと)を工場(こうじょう)などで強制的(きやうせきてき)に労働(らうどう)させたこと。アジア・太平洋戦争(あじあ・たいへいやうせんそう)末期(まき)には、戦況(せんきやう)の悪化(あくか)につれて動員体制(どうぎんたいせい)が強化(きやうか)されていっ(い)った。
*「まきぎやはん」：「まきぎやはん」とも。脚絆(あしはん)のひとつ。小幡(こはた)の長い布(ぬい)で、足首(あしむす)からひざ下(ひざした)まで脚(あし)を巻(ま)き上げるもの。ゲートルともいわれ(ら)れた。

44年10月3日

今日(きょう)は日本晴(にっぽんはる)でよいお天気(あま)であっ(あ)った。運動会(うんどうかい)もいよいよ近づ(き)づいて来(き)ました。



11月2日、稲刈り実習。(「瀨田国民学校絵日記 昭和十九年 五年智組」大津市歴史博物館所蔵)

今日(きょう)は予行演習(えんしゅう)である。朝(あ)みみんなは白(しろ)いはちまき白(しろ)いふく(ふく)、黒(くろ)いぶるまをはいて朝礼(あさらい)に集(あ)って来(き)られました。(略) 今日(きょう)はつな(つな)引(ひ)ばかりしていま(いま)した、赤白(あかしろ)の組(ぐみ)に分(わ)れてみんな一(いつ)生懸命(いっしやうけんめい)に引(ひ)きました。(略) 今日(きょう)は一番(いちばん)しまいに防空演習(ぼうくうえんしゅう)があっ(あ)りました。モモを高くあげて手(て)を張(は)って勇(ゆう)しく行進(しんしん)しました。校長先生(けいちょうせんせい)に向(むか)って敬礼(けいらい)をし(し)ました。行進(しんしん)が終(お)わった後(あと)で空(そら)をみると大へんきれいな真綿(まわた)のような雲(くも)がニジ(にじ)のよう(よう)に美(うつく)しくかかっ(か)っていました。たのしい予行演習(えんしゅう)もすみ(す)ました。

44年11月2日

今日(きょう)は午前(ごぜん)までで勉強(べんきやう)がしまえて、午ご(ご)から作業(さぎょう)であっ(あ)った。もうじき私(わたし)たちが突かん(とつかん)部隊(ぶたい)となっ(な)って出征家ぞく(しゅつせんかぞく)の家(いへ)へお手伝(おて伝)いに行(い)くので稲刈り(いねかり)・束ね方(たねかた)などを教(おし)えていただ(い)いた。瀨田国民学校(せだのこくみんがっこう)も稲刈(いねかり)で私(わたし)たちは稲(いね)をはこんだり刈(かり)ったりして(して)いるのを汽(き)車(くるま)に乗(の)っている人(ひと)に、つよい・第二(だいに)の少国民(せうこくみん)であること(こと)を見ていただ(い)いた。ずっ(ず)と前(まへ)にみんなと先生(せんせい)ととも(とも)にたのしく、ゆか

満州での日本人としての教育

1932年2月、「満州国」を立国し、植民地化した満州の学校では満州の人にも日本人の教育を行っていました。その生徒だったエルテムテグスさんの貴重な記録が残されています。

私の日常生活 (蒙古語からの訳)

満州国王爺廟興安学院 四年生 エルテムテグス

一 まえがき

私は今年もう満20歳になった一青年です。蒙古人の教育がおくれているために今回まだ中級の学校で学生生活を送って居ります。故に、もしよその国だったら、この年頃には勇ましい兵官にはいり、いかめしい軍服を着て、或る時は広い練兵場に訓練を積み、或るときは多くの友達と遊び、或は野原に行軍野営して、帝国を守るために、攻め来る敵を打ち破り、あっぱれ若人の名をあげる頃でしょう。然るに私の今の状態を思い、更に私以外のこの学校の友達が、大抵こういう状態であることを思い、外国の人々とくらべると実に

日本がマレー半島に進撃したあと、日本語を教える教室を開いた。

(『画報日本近代の歴史12戦争の惨禍』)



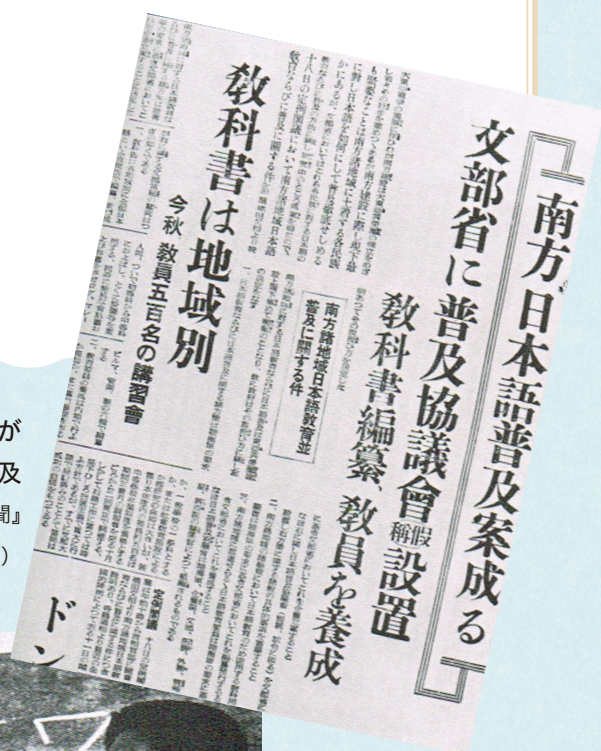
立ちおくれていて恥ずかしいですから、この生活を多くの方々に知らせようとして前書きを書きました。それではひとつひとつ話して行きましょう。

二 学課のある日の生活

学校生活ですから非常に規則正しいです。朝5時頃(四季によって多少変わります)陽がまだのぼらない暗がりのなかに、起床ラッパの音が朝の空気をつんざいて聞こえて来ます。この頃まだ夢路を辿っている私達は、すばやくはね起きて10分間で顔をあらひ着服着帽して、次の合図がなるやいなやならんで外に出て、点呼をうけ感謝のことばを誦します。その言葉は次のようです。

日本帝国の御恩を感謝いたします。
満州帝国の御恩を感謝いたします。
父母の御恩を感謝いたします。
恩師の御恩を感謝いたします。

陸海軍の要求で、文部省が日本が占領した南方地域で日本語を普及することを報じた記事。(『朝日新聞』1942年8月19日付夕刊(18日発行))



日本語教育をうけるマレー地域の青年たち。(『画報日本近代の歴史12戦争の惨禍』)

4

ほしがりません勝つまでは —銃後の家庭や地域の生活—

食物は一汁一菜(*)とし、お弁当は日の丸弁当

日中戦争が激しくなった1939年、興亜奉公日(*)がもうけられました。毎月1日に設定され、国旗掲揚、宮城遙拝、神社参拝、勤労奉仕などが行われました。

*一汁一菜：一汁と一品の菜(おかず)の食事。粗食のたとえ。

*興亜奉公日：国民精神総動員運動の一環として、1939年9月から1942年1月まで実施された生活運動で、毎月1日に設定された。興亜とは、アジア諸国を盛り立てるという意味。

この時期の「文集」には、銃後の生活を描いたものがたくさん残されています。

道に「ぜいたくは出来ない筈だ!」の立看板。1940年8月1日に国民精神総動員本部は東京市内に1500本の看板を立て、宣伝した。「ぜいたくは敵だ!」の看板には敵の上に「す」の字を書き込み「素敵」と読ませるはずらもあった。(『画報日本近代の歴史11戦争と国家総動員』)



興亜奉公日には、飲食店、喫茶店も休業するところが多くなった。(『画報日本近代の歴史11戦争と国家総動員』)



興亜奉公日

山形市第三尋常高等小学校 六年 船山 吉弥

今年(1939年)の9月1日から興亜奉公日が行われることになりました。此の日1日は日本全国民挙って皆戦場にある気持ちをもち兵隊さんの労苦をしのいで自分自分の職分に励み一億一心、奉公の誠を以て興亜の大業を全うし強力日本の建設に突進する覚悟を新にする日であります。(略)

それで本県に於ては数年前から行なおうと心掛けて来た。

県民生活刷新五綱領

- 一、時間を守りましょう。
- 二、社交上の陋習(*)を止めましょう。
- 三、簡素生活を実践しましょう。
- 四、禁酒禁煙に努めましょう。
- 五、衛生と保健に注意しましょう。

この五つのことを更によく守ること、新たに

- 一、国旗を掲揚すること。
- 二、皇太神宮を遥拝すること。
- 三、正午に皇軍の武運長久を祈願し、戦没将兵の英霊に感謝するために黙祷を捧げること。
- 四、応召軍人やその遺家族を慰問すること。
- 五、勤儉節約に努めなるべく多くの報国貯金を行うこと。
- 六、忠魂碑や戦没将兵の墓碑等の清掃をなすこと。

になったと言うことを校長先生からお聞きしました。それでは僕等少年としてはどんなことをすればよいのだろうか。先ず当日は特に朝早く起き、宮城並に皇太神宮を遥拝して国旗を掲揚します。又近くの神社に行って皇軍の武運長久を祈願し戦没将兵の忠魂に感謝の誠を捧げることです。

又興亜資源の大切なことを考え勤儉節約に努め一枚の紙、一銭のお金も無駄にせず報国貯金をしなければなりません。

又、慰問袋や慰問文を送る日を定めて近親の人や、友人の家族の方で出征なさっている兵隊さん達をお慰めすることもいいことだと思います。

貯金が弾丸の資金に

貯金

あまがさき しつかぐち 尼崎市塚口国民学校 初三 福島 尚嗣

大東亜戦争が始まってから日本の国民は一人残らず貯金をしなければいけないとやかましくいわれています。米英をうちまかす飛行機も戦車も軍艦もみんな1億の国民が貯金したお金で作られます。ぼくは学校で毎月3円ずつ貯金をしていますが、もう78円にもなりました。ぼくはもっと貯金をしたいなあ、どうしたらいいかなあ、といろいろ考えました。そして毎日赤ちゃんのはいきゅうのパンを取りに行って貯金することにしました。パンは9銭ですが10銭もって行っておつりにもらった1銭を貯金にしようと思いました。それでおかあさんに

「これからぼくがパンをとりに行きますからぼくにパンのおつりを下さい。」

といいますとおかあさんは

「おつかいをしてくださるのはいいことですがおつりはどうするの？」

とお聞きになりましたのでぼくは

「おつりをためてだんがん切手を買いたいのです。」

といって今年の夏やすみ前から毎日パンをもらいに行っています。おかあさんは時々50銭下さいますので41銭おつりをもらったこともありました。それも貯金にしましたので、10月にはもうだんがん切手を1枚買いました。ぼくは早く2枚目がかえるようになればいいなあと思っています。そしてまだいろんなことをしてお国のためにもっと貯金をしたいと思っています。

(『少国民の友』1943年3月号)

銃後の生活では、お金を節約して貯金することが奨励されました。愛国貯金と呼ばれていました。

弾丸切手とは、アジア・太平洋戦争中に日本で発行された、賞金くじ付きの貯金切手のことです。「よく当たる」「買った貯金が(武器としての)弾丸の資金になる」ということで「弾丸切手」の愛称が付けられました。みんな米英を打ち負かすため

の飛行機、戦車、軍艦の資金になればと協力したのです。

福島さんが苦労して買った弾丸切手は、どうなったのでしょうか。敗戦で価値はほとんどなくなったといわれています。



節約して武器を作るお金にまわせと宣伝するマンガ広告。

(小泉紫郎画『写真週報 第300号』1943年12月8日発行)